

スラッシャー教授の退任に寄せて

宗教部長 金 永秀

スラッシャー先生との出会いは、2002年、沖縄キリスト教学院大学の出発に先んじて新学部初代学部長としての準備をするために沖縄に来られた時にさかのぼります。人文学部の出発にご努力をされました。又、その準備と共にキリスト教短期大学の教員としても務められました。先生は大学を卒業されて、最初「米国合同メソジスト教会」の教育宣教師として沖縄に来られ、沖縄キリスト教学院の発足の時代に英語を教えられました。その時に出会われた御夫人が沖縄の方ですので、沖縄にはことさら強い思いをもって赴任されたのではないかと思います。

当時、私は沖縄に来て二年しか経っていない時で沖縄と沖縄キリスト教学院についてより多くのことを知りたいと思っておりました。先生から沖縄キリスト教学院の創立時の人々、宣教師や牧師、教会員、学生達のことを聞かせていただくのが楽しみでした。先生自身も楽しそうに話されました。当時の学院や沖縄の状況を耳にすることは興味深いだけでなく、本学の成り立ちを理解するのに大変参考になりました。特に初代理事長、学長の仲里朝章牧師先生のことについては、大変尊敬されている御様子でした。仲里先生のお人柄やエピソードをもっと知りたいと今でも思います。

人文学部の立ち上げと共に、英語コミュニケーション学科の学科長を兼任されたことから、一時はその激務の為に病にかかれたこともあり、多くの人々が心配いたしました。細かい作業や事柄について丁寧にな

される方でしたので、後日、学長に選ばれてからは、そのような気配りを重ねることも多かったのでしょうか、再び体調を崩されて道半ばにして職を辞されることになったのではないかと推測いたします。

そのことで特に記憶に残っているのは、それまでの学内の組織をドラスティックに改変しようとされたことです。そのことを実行に移そうとして努力をされたのですが、時間的な余裕がなかったことや論議を深めることが叶わなかったことから、健康を害する遠因になったのかとも思われます。組織改変に関して、学内で賛否両論がございました。この点について一ついえることは、そのような意見の交換や議論が、本学の教育そのものの「進化」と「深化」のために様々な形態と内容をもって長く継続されるべきであったということです。今も変わらず、根本的な教育の質と方法そして構造のあり方が問われているからです。

スラッシャー先生は、敬虔なキリスト者で宗教委員会の一員としても様々なアイデアを出され、大いに参考になり助けになりました。時として、意見を激しくたたかわせたこともあります。それも、今となっては懐かしい思い出となりました。何度か研究室でいただいたコーヒーの味も忘れられません。

長い間、本学院大学のために重責を負ってご尽力してくださいましたこと、また、多くのことを学ばせていただきましたことに感謝いたします。